一般国道9号安来道路建設予定地内

# 埋蔵文化財発掘調査報告書[]

1991年3月

建設省松江国道工事事務所 島 根 県 教 育 委 員 会

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

当安来道路においても、道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成2年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根 県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成3年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 菅 原 信 二

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成2年度一般国 道9号安来道路建設予定地内遺跡の調査を実施いたしました。

島根県下でも安来平野は、古代から文化の栄えた地域で数多くの遺跡が存在して おります。今年度調査を実施した宮内遺跡や島田南遺跡からも弥生時代から平安時 代頃にかけての集落跡や、古墳、横穴墓などが発見されました。今回の調査結果か らは安来平野を望む低丘陵地帯には大規模な集落跡が営まれていたと考えられます。

本書が、安来市の歴史を解明する契機となり、また、広く埋蔵文化財に対する理 解と関心を高めることに役立てば幸いと思います。

なお、調査にあたりご協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ、関係 者各位に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

島根県教育委員会 教育長 原 田 俊 夫

# 例 言

- 1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成2年度に実施した一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概報です。後日、平成元年度調査の結果と合わせて、本報告を作成する予定です。
- 2. 本年度は、宮内遺跡(安来市佐久保町字栗坪 156 外)、島田南遺跡(安来市島田町字 雨谷 9 1 外)、臼コクリ遺跡(安来市佐久保町字臼コクリ 766 4 外)、岩屋口遺跡(安来市佐久保町字カワラケ免 517 外)、越峠遺跡(安来市黒井田町字高垣1714 23外)、オノ神遺跡(安来市黒井田町字越峠1708外)、谷遺跡(安来市黒井田町字石丸 1683 2 外)の7遺跡の調査を実施しました。
- 3. 調査組織

事 務 局 泉 恒雄(文化課長)、藤原義光(同課長補佐)、勝部 昭(同)、 野村純一(文化係長)、坂根 繁(文化係主任)、 田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調 査 員 卜部吉博(文化課埋蔵文化財第二係長)、今岡一三(文化課主事)、 宮本正保(同)、石原 順(教諭兼主事)、井上正志(同)、 山尾一郎(同)、江川幸子(調査補助員)

調査指導者 山本 清(島根県文化財保護審議会委員)、田中義昭(島根大学法文学 部教授)、井上貴央(鳥取大学医学部助教授)、三辻利一(奈良教育大 学教育学部教授)、穴澤義功(たたら研究会委員)、綿貫邦男(群馬県 埋蔵文化財調査事業団)、山口直樹(房総風土記の丘)、清水真一(桜 井市立埋蔵文化財センター)

- 4. 本書に掲載した「遺跡位置図」は、建設省国土地理院発行のものを使用しています。
- 5. 本書の執筆、編集は調査員が討議してこれを行なった。
- 6. 本遺跡出土遺物及び写真は、島根県教育委員会で保管しています。

# 次

Ι	位置と環境	1
Π	調査に至る経緯、経過	3
Ш	宮内遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	4
IV	島田南遺跡の概要	19
V	範囲確認調査の結果	28

# Ⅰ. 位置と環境

宮内遺跡は、安来市街地の南側、安来市佐久保町・宮内町に存在し、安来平野の東に広がる低山塊の西側縁辺部に位置する。

島田南遺跡は、安来市の北東部、安来市島田南字雨谷に存在し、中海を北に望み、東へのびる低丘陵とその東斜面に存在する。

宮内遺跡、島田南遺跡周辺では、縄文時代以前の遺跡はほとんど知られていない。弥生時代には、集落遺跡としては宮内遺跡南東の丘陵西斜面に、後期に属する六角形の平面プランをもつ竪穴住居を検出した叶谷遺跡がある。また、その南西の独立丘陵上には、径 5 m前後と推定される円形プランをもつ竪穴住居を確認した大坪遺跡が存在する。

埋葬遺跡では、宮内遺跡南約2kmの丘陵頂部に山陰の弥生土器編年において、後期の標式遺跡となっている九重土壙墓が知られている。

古墳時代には、集落跡としては、前述した叶谷遺跡において初頭に属する隅丸方形プランの竪穴住居を検出している。また宮内遺跡の東1.5㎞の中海を北に望む丘陵先端部に全長50㎞の前方後円墳で、舟形石棺を持つ昆売塚古墳がある。そのほか、宮内遺跡北西に隣接する丘陵には、直径30㎞をはかる円墳であるあんもち山古墳、箱式石棺をもつ糺神社古墳群が存在する。また、当地域は、横穴墓が密集している地域であり、家形石棺をもつ堤谷横穴などが知られる。

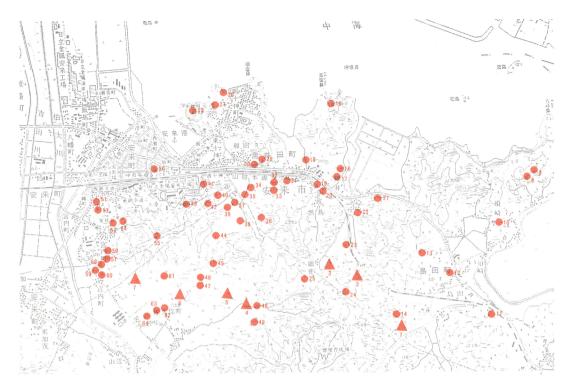
一方、生産遺跡としては、緑色凝灰岩のチップ、円面硯が採集されている大原遺跡が、 宮内遺跡東側の独立丘陵上に存在する。また、島田南遺跡南東の谷奥部には、5世紀末と 推定される出雲地方最古の須恵器窯である高畑古窯跡群が存在するなど、島根県でも古代 の遺跡が最も集中している地域のひとつである。

### <参考文献 >

『国道 9 号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 I 島根県教育委員会 1976 『島根県埋蔵文化財調査報告書』 XI 島根県教育委員会 1985

『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1984

『島根県生産遺跡分布調査報告書IV·玉作関係遺跡』 島根県教育委員会 1987



第1図 周辺の遺跡地図

1.	島田南遺跡	2.	谷遺跡	3.	才ノ神遺跡	4.	越峠遺跡
5.	岩屋口遺跡	6.	臼コクリ遺跡	7.	宮内遺跡	8.	岩崎宅横穴
9.	赤崎山横穴	10.	ちょう塚古墓	11.	東谷古墳	12.	佐伯瓦窯跡
13.	剣御崎さん古墳	14.	イナリ山古墳	15.	高留古墳	16.	米垣山横穴
17.	黒鳥横穴	18.	長曽遺跡	19.	大日さん五輪塔	20.	大日さん古墳
21.	小浜古墳	22.	内田 • 永田瓦窯跡	23.	大納言山古墳	24.	細井鈩谷鈩跡
25.	越峠古墳	26.	東十神遺跡	27.	小十神山古墳群	28.	十神山古墳
29.	宮の山古墳	30.	和田横穴 • 奥津神神	仕横り	て 31. 浦ケ部	遺跡	
32.	長曽土壙墓群・刎	畑古墳	<b>資群</b> 33. 刎畑运	貴跡	34. 米垣遺跡		35. 客の前遺跡
36.	高袋遺跡	37.	客さん古墳	38.	高広遺跡	39.	長廻谷古墳群
40.	佐久保山横穴	41.	毘売塚古墳	42.	佐久保遺跡	43.	釜谷古墳
44.	長廻谷遺跡	45.	大神谷古墳群	46.	大荒神谷土壙墓	47.	大荒神谷遺跡
48.	高垣遺跡	49.	寺谷遺跡	50.	愛宕山古墳	51.	八幡山古墳
52.	社日山横穴	53.	堤谷横穴	54.	乗相院浦山横穴群	55.	日本台土壙墓
56.	糺神社古墳群	57.	若宮古墳	58.	御崎山古墳	59.	山の谷横穴群
60.	あんもち山古墳	61.	大原遺跡	62.	玉造土壙墓	63.	玉造遺跡
64.	禿前古墳						

# Ⅱ. 調査に至る経緯、経過

今年度の調査は、一般国道9号安来道路の建設工事に伴い、1989年に開始された発掘 調査の2年目にあたり、宮内遺跡、島田南遺跡の全面調査と、臼コクリ遺跡、岩屋口遺跡、 越峠遺跡、オノ神遺跡、谷遺跡の計5遺跡の範囲確認調査を実施した。

一般国道9号安来道路は、当初一般国道9号バイパスとして計画されたもので、1972年 にこれにかかる最初の調査が実施された。その後、1987年に高規格道路に設計変更され、 ルートの変更がなされたため、1987年と1988年に再度分布調査を実施し、1989年から、発 掘調査を開始した。

今年度の調査は、宮内遺跡、島田南遺跡については、昨年の範囲確認調査の結果をもと に調査区を設定し、他の遺跡については、新たにトレンチを設けて調査を行った。

宮内遺跡は4月23日、第 I 調査区から調査を開始した。 I 区では、掘立柱建物跡2、竪穴住居1などの遺構を検出し、実測、写真撮影の後7月14日に I 区の調査を終了した。 IV 区は I 区にひきつづき調査を実施した。 IV 区では竪穴住居4、横穴墓1などの遺構を確認し、12月21日に調査を終了した。 III 区は、 I 区の調査終了後、 IV 区と並行して調査を実施した。 III 区では、須恵器、土師器、緑色凝灰岩などの遺物を検出したが、遺構は検出されず、12月21日に調査を終了した。

島田南遺跡は、A区、B区、C区の順に調査を行った。A区は4月23日から調査を開始した。A区では、遺構、遺物ともに検出できず、調査を終了した。B区は、A区にひきつづき調査を実施した。遺構は検出されず、須恵器を少量確認して、調査を終了した。つづいて、C区の調査を開始し、掘立柱建物跡6、土壙5、溝状遺構1、ピット多数を検出した。その後実測、写真撮影を行い7月27日に調査を終了した。

範囲確認調査は、越峠遺跡、オノ神遺跡、岩屋口遺跡、臼コクリ遺跡、谷遺跡の順で実施した。期間は、越峠遺跡から順に7月30日~8月28日、9月10日~9月21日、10月1日 ~10月19日、10月22日~11月16日、11月26日~12月21日である。このうち、谷遺跡を除いた他の遺跡では遺構の存在を確認した。

# Ⅲ。宮内遺跡の概要

宮内遺跡は、安来平野の東側に位置する丘陵地の西側縁辺部に存在し、伯太川の沖積作用によって形成された低地から低丘陵にかけて立地する。調査は、遺跡最西端の低地をI区、遺跡のほぼ中央に位置する谷間部分をⅢ区、遺跡最東端の低丘陵をⅣ区とする調査区を設定して実施した。

# I 🗵

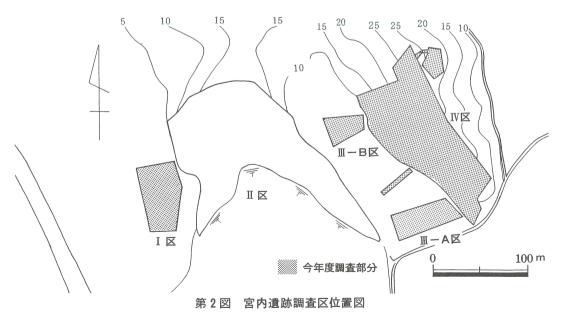
標高  $3.5\,\mathrm{m}$ をはかる水田である。調査区のほとんどは、伯太川の沖積作用によって形成された低地で、下層は砂層であるが、東側には地山が存在し、遺構の一部はその上に設けられる。検出した遺構は竪穴住居 1 棟( $\mathrm{SI}-01$ )、掘立柱建物 2 棟( $\mathrm{SB}-01$ 、02)土壙 3 穴( $\mathrm{SK}-01\sim03$ )、土壙墓 1 基( $\mathrm{SK}-04$ )、ピット多数である。

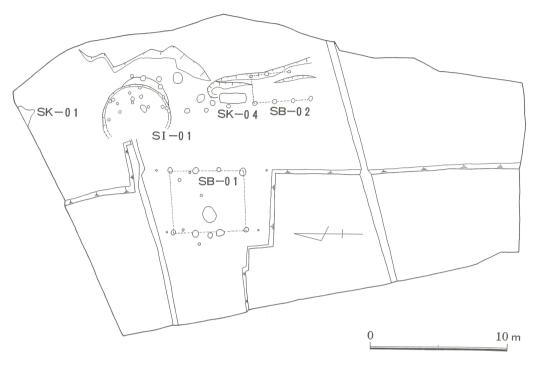
# SI - 01

調査区北東で検出したもので、直径4m程度の円形住居と推定される。住居付近から 西側は、地山が急激に落ちこんで砂層になっているため、東側半分を検出したのみである。 遺物は、埋土中から弥生土器、石錘、緑色凝灰岩などが出土している。

### SB-01

調査区のほぼ中央に位置し、桁行3間(5.4 m)×梁間1間(4.5 m)で、桁行がほぼ南北方向をとる。柱穴内から、埴輪、土師器、須恵器が検出された。





第3図 I区全体図

# SB - 02

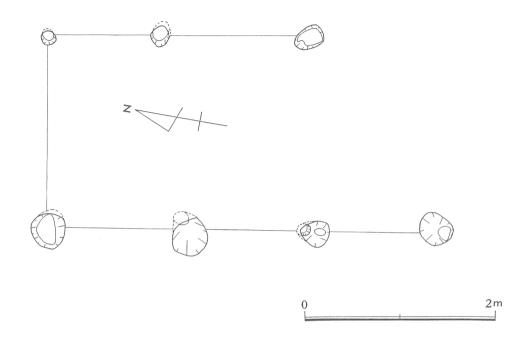
調査区東側に位置し、尾根から緩やかに下る斜面上に立地する。桁行は東側が2間(2.8 m)、西側で3間(4.8 m)、梁間は1間(2.0 m)である。柱穴内から弥生土器が出土している。

図8の1はSB-02の柱穴内から出土した弥生時代の壷形土器である。口径は26.2cmである。口縁端部は斜め内側におりまげられ、4条の凹線文を施す。口縁部内面には2条単位の斜格子文が入る。口縁部内面はヨコナデ調整で、他は風化のため調整は不明である。

# SK-01

調査区北東に位置する。排水用の側溝を設ける際に一部カットされているが、東西30cm、南北が現存長80cm、深さ10cmをはかる浅い皿状の落ち込みである。須恵器蓋坏が2個体、土師器高坏が3個体、短頸壷1個体が検出された。

図6の1は須恵器の蓋坏の蓋で、口径11.6cmをはかる。器高の1/2程度のところに段を設ける。調整は内面は回転ナデ、外面は頂部に回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデを施す。2は蓋坏の身である。口径は10.2cmをはかる。口唇部内面に段を有し、立ち上がりも高く、器高の1/3程度を占める。調整は、内面は回転ナデ、外面は底部に回転ヘラケズリ、他は



第4図 I区SB-02

回転ナデを施す。3は土師器の高坏である。口径は18.1 cm、底径 8.5 cmをはかる。坏部外面にはわずかに稜をつくり出す。調整は内、外面ともナデを施す。

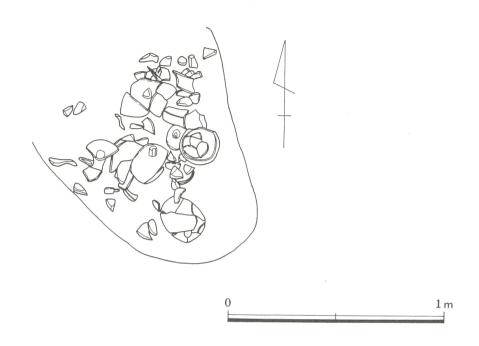
# SK-04

SB-02の東側に隣接し、長辺  $2.0 \, \mathrm{m}$ 、短辺  $0.9 \, \mathrm{m}$ 、深さ  $0.3 \, \mathrm{m}$ をはかる。埋土中からは、弥生土器片が出土したが、 $2 \, \mathrm{m}$  個体以上存在することは確実である。また $20 \, \mathrm{cm}$ 大の石が  $3 \, \mathrm{m}$  個発見された。

図8の2は弥生時代の甕形土器で、口径30.0 cmをはかる。口縁端部はわずかに上方へのび、外面はわずかな凹みをもつが、沈線は施されない。頸部には貼付の指頭圧痕突帯が巡る。調整は、口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は内面がハケメののちヘラミガキ、外面がハケメ調整である。

このほか、SB-01検出面及び、SK-04東側で、ピットを多数検出した。SK-04東側のピットから、弥生土器片がわずかに検出されたほかは遺物は検出されず、ほとんどの時期、性格とも不明である。

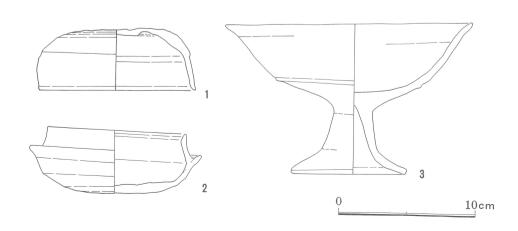
遺物包含層中からは、弥生土器、土師器、須恵器のほか、埴輪、磨製石斧、石鏃、管玉 1、緑色凝灰岩のチップ多数が出土している。



第5図 SK-01土器検出状況

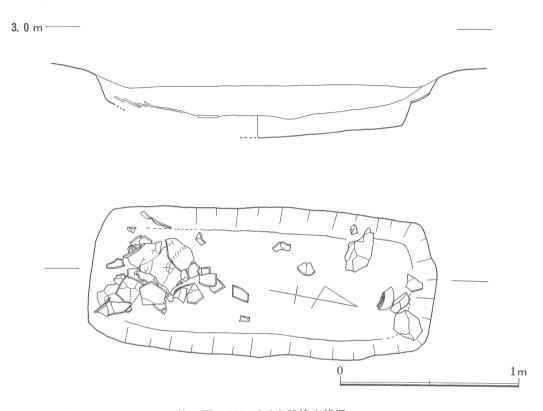
# **II X**

北東から南西へのびる2本の低丘陵の間に位置し、南西に開く谷状の部分で、近年まで 水田などとして利用されていたようである。耕作土がかなり厚く堆積しており、遺構は全

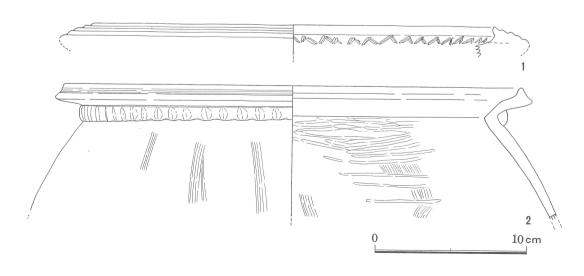


第6図 I区SK-01出土土器

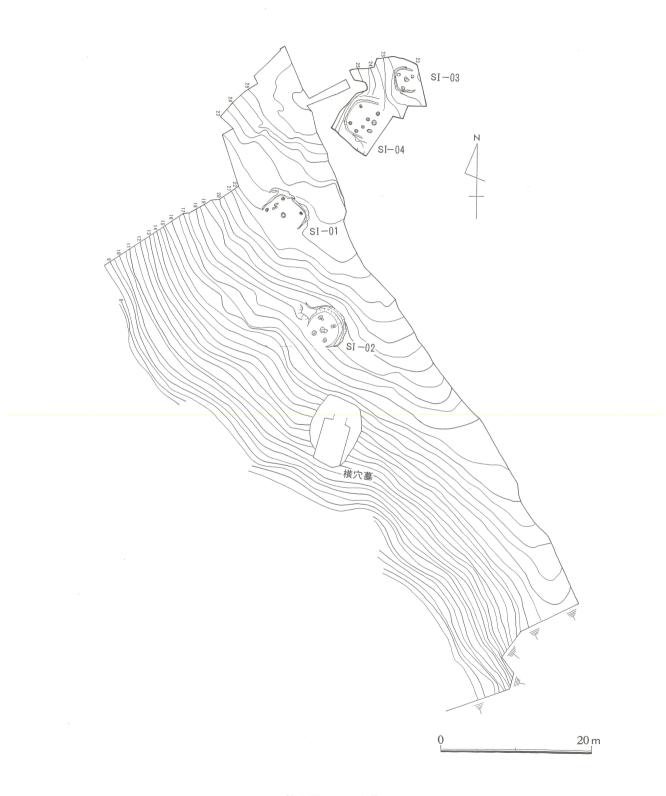
く検出されなかった。遺物は、土師器、須恵器、弥生土器、緑色凝灰岩などが出土し砂層 中からは、縄文土器が少量検出されている。



第7図 SK-04土器検出状況



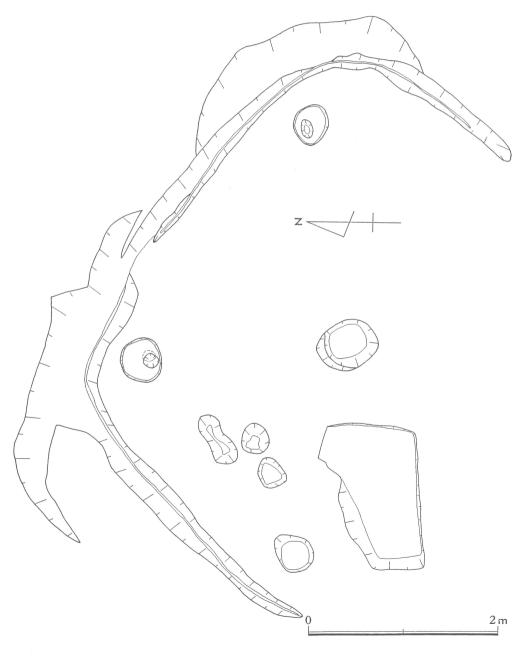
第8図 I区 SB-02、SK-04 出土土器



第9図 IV区全体図

# IV 🗵

宮内遺跡の最東端に位置し、標高約 $20\,\mathrm{m}$ の尾根上である。IV区から検出された遺構は、 竪穴住居 $4\,\mathrm{k}$  (S I  $-0\,\mathrm{1}\sim$ S I  $-0\,\mathrm{4}$ ) と、横穴墓 $1\,\mathrm{r}$ 、石室(残穴)などである。



第10図 IV区S I - 0 1

# SI - 01

尾根の稜線からやや西側に下った所に位置し、標高は約22 mでIV区で発見された住居の中で、最も高く立地する。規模は、周壁の肩部で長辺 5.3 m、短辺 4.0 mをはかる隅丸方形住居である。柱穴は 4 穴と推定されたが、3 穴のみが検出できた。

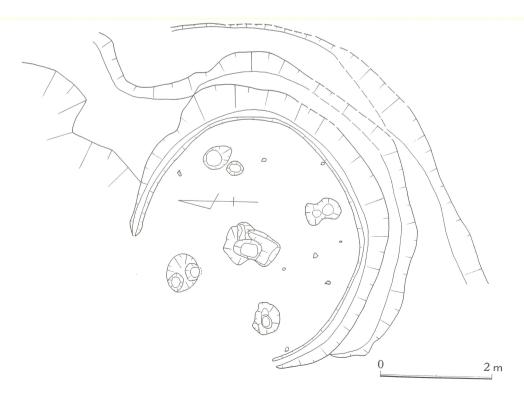
図14の1は弥生時代の甕形土器で、口径13.6cmをはかる。口縁端部は大きくのびて外反し、外面に10条以上の櫛描平行沈線をめぐらす。全体に風化が著しく、調整は不明である。

### SI - 02

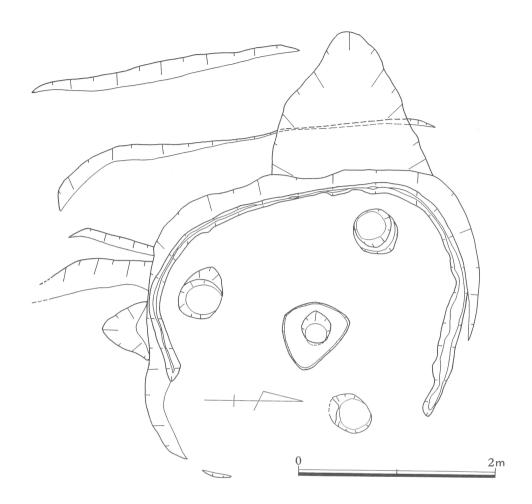
西側斜面の中腹に位置し、標高は約18mをはかる。規模は周壁の肩部で長辺4.8 m、短辺3.6 mをはかる円形住居である。遺物は床面から弥生土器、緑色凝灰岩が出土しているが、土器は風化が著しく、詳細な時期は不明である。

### SI - 03

尾根頂部の平坦面からわずかに東に下った位置にあり、標高は $21.7\,\mathrm{m}$ をはかる。住居の背後には、 $\mathrm{SI}-0.2\,\mathrm{c}$ 同様に、幅 $40\,\mathrm{cm}\sim70\,\mathrm{cm}$ の平坦面を $2\,\mathrm{g}$ つくり出す。規模は周壁の肩部で南北長  $3.5\,\mathrm{m}$ をはかり、柱穴は $3\,\mathrm{r}$ で検出した。遺物は出土していない。



第11図 Ⅳ区SI-02

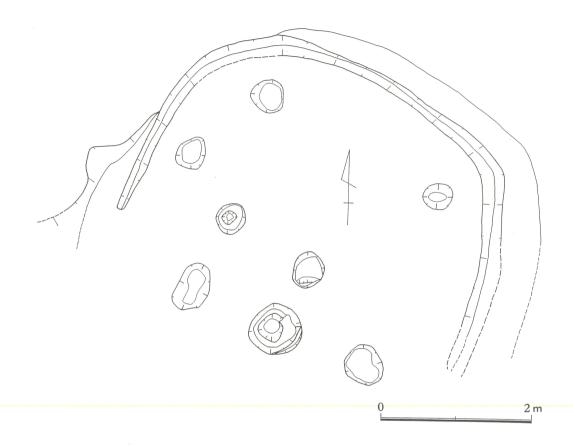


第12図 IV区S I - 0 3

# SI - 04

SI-03の南西に隣接し、標高は23.7mをはかる。規模は周壁の肩部で長辺5.0m、短辺3.4mをはかる隅丸方形住居である。住居の背後北東~南西にかけて幅40cmの平坦面がめぐる。床面からは、ピットが8欠検出された。

図14の2は弥生時代の甕形土器で、口径は17.6 cmをはかる。口縁端部は外傾し、外面に7条の平行沈線を巡らす。口縁部と頸部は内外面ともヨコナデ調整するが、内面頸部以下風化のため調整不明である。3 は短頸の壷形土器である。口径は8.7 cm胴部最大径は19.1 cmをはかる。口縁はやや内傾してたちあがり、頸部に孔をもつ。調整は内面口縁部がナデ、胴部はヘラケズリを施す。外面は風化が著しく不明である。



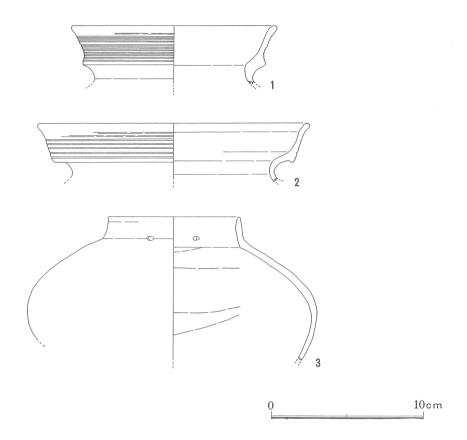
第13図 IV区SI-04

# 横穴墓

西側斜面の中腹に設けられる。幅約4 m、長さ6.5 mの前庭部を有し、玄門は幅80cm、高さ90cmをはかる。玄室は幅2.9 m、奥行2.0 m、高さは中央で1.6 mをはかる平入りの擬似四柱式である。玄室右側の床面には、壁沿いに浅い溝がめぐる。また玄室内には厚さ60cm程度に土砂が堆積していた。

遺物は、前庭部から須恵器の蓋坏、短頸壷などが出土している。玄室内からは、堆積土砂上面や土砂中から獣骨と緑色凝灰岩が出土し、床面からは人骨が検出されたが、須恵器は確認されなかった。

図16は横穴墓前庭部から出土した須恵器である。1は坏蓋で、口径11.5 cmをはかる。 口縁端部外面にわずかに稜をもつ。調整は内外面とも、ほとんど回転ナデであるが、外面 頂部のみ、不整方向のナデを施す。2は坏身で、口径9.2 cmをはかる。たちあがりが短く 内傾するもので、底部にヘラ記号をもつ。調整は全体に回転ナデを施す。3は高坏である。



第14図 IV区SI-01、04出土土器

口径10.5cm、脚端部径7.6cm、器高8.7cmをはかる。全体に回転ナデ調整をほどこす。

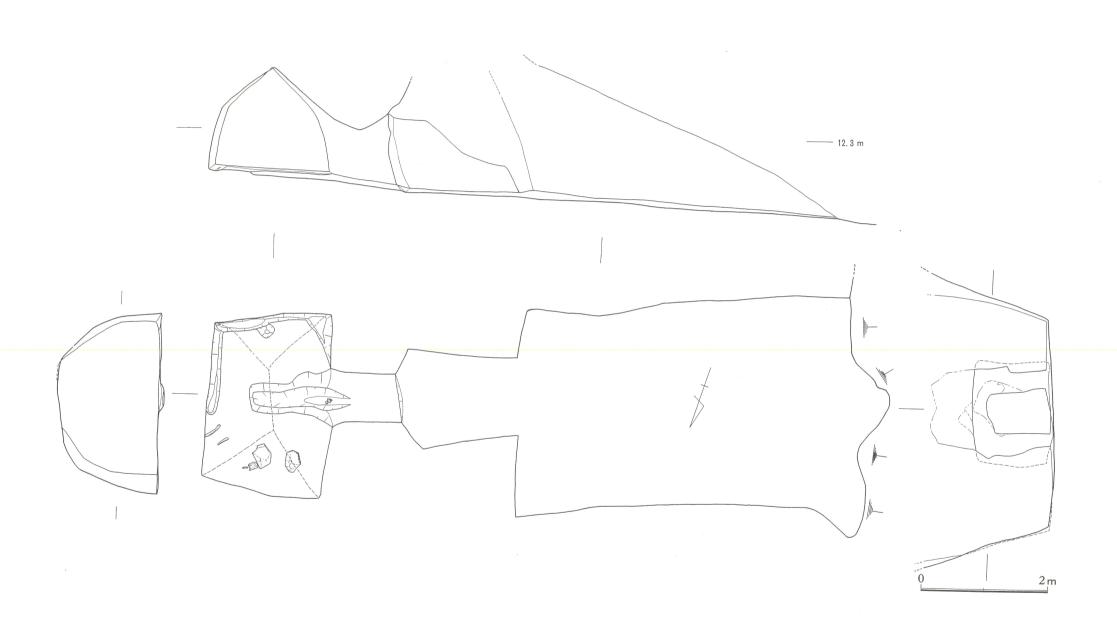
4 は短頸壷である。口径 7.0 cm、胴部最大径15.6 cmをはかり、頸部にヘラ記号をもつ。口縁部は内外面ともナデ調整、体部はカキメ調整、底部は回転ヘラケズリを施す。

# 石 棺(残欠)

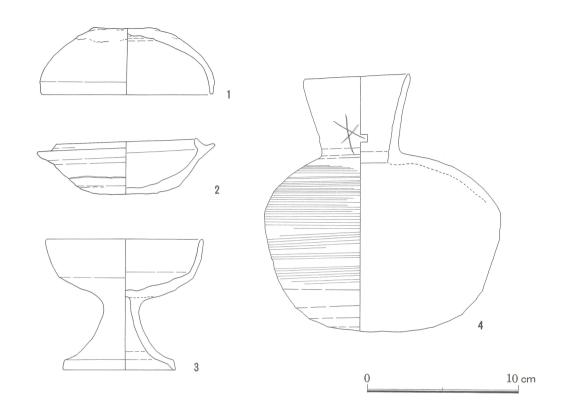
丘陵頂部からわずかに西側に下った平坦面上に存在し、地山面直上から検出された。石材はわずかに灰色がかった白色を呈する凝灰岩である。刳り込みやノミ痕が確認できるが、破壊を受けて、遺存状況が悪く、規模や形態は不明である。石棺の北側に隣接して、幅20cm~30cm、深さ5cm~10cmの浅い掘形が存在する。

また、石棺の東約2 m、南東約3 mの2箇所から須恵器の蓋坏、壷などがそれぞれまとまって出土している。いずれも地山直上から検出されたもので、石棺と何らかの関係をもつと考えられる。

遺構に伴わない遺物としては、須恵器、土師器のほか、墨書土器が出土している。



第15図 IV 区横穴墓



第16図 横穴墓出土土器

# 小結

今回の発掘調査の結果、I区で弥生時代中期と考えられる土壙墓・竪穴住居・掘立柱建物が、ほぼ同時期に隣接して存在するという状況を確認した。当時の竪穴住居と掘立柱建物の関連、及び柱居と墓との関連を考えるうえで、注目すべき例だと言えよう。

また、IV区で検出された隣接する4棟の住居跡は、SI-03からは遺物が出土していないため、時期を確定することはできない。しかし、弥生時代後期後半から古墳時代初頭という、比較的短い間幅の中で捉えることは可能であり、この地域における当時の集落形態や変遷を知るための貴重な資料ということができる。

一方、横穴墓は、調査区内から1穴が検出されたにとどまった。また、前庭部からは、 壺・蓋坏など完形の須恵器を出土しているが、玄室内からは、須恵器を発見できなかった ことなど、横穴墓のありかたとしては特殊な状況を示した。伯太川右岸における、横穴墓 の発掘調査例が少ない現時点では、この横穴墓の評価は難しい。伯太川右岸の他の地域に おける今後の資料の増加を持ち、あらためて位置づけをする必要があろう。

また、石棺(残欠)については、後世の改変を受け墳丘は消失しているものの、地山面に石棺を据えたと考えられる加工痕があること、すぐ近くから須恵器の蓋坏・壷などが完形で出土していることなどから、石棺を主体としてもつ古墳がIV区に存在したことは間違いないであろう。

このほか、注目すべき遺物としては、I 区から検出された碧玉製の管玉や各調査区から出土した緑色凝灰岩がある。

これらについては、宮内遺跡東の独立丘陵に立地する大原遺跡、東南に隣接する玉造遺跡などからは、緑色凝灰岩は確認されていないものの、碧玉、瑪瑙等が採集されている。 玉作を考えるうえでこれらの遺跡の規模、性格の解明は不可欠であり、それを踏まえたうえで、宮内遺跡との関係をどう捉えるかが今後の課題となってくるであろう。

宮内遺跡は、集落遺跡、埋葬遺跡の性格をもち、また玉作との関連が濃厚な遺跡で、安 来周辺の古代を解明する上で、重要な資料になると考えられる。

# Ⅳ. 島田南遺跡の概要

島田南遺跡は、中海を北に望む西側へのびる丘陵上とその谷間に位置する。調査範囲が 3箇所に分かれていたため、西側から順にA、B、C地区として調査を行った。

# A 地区

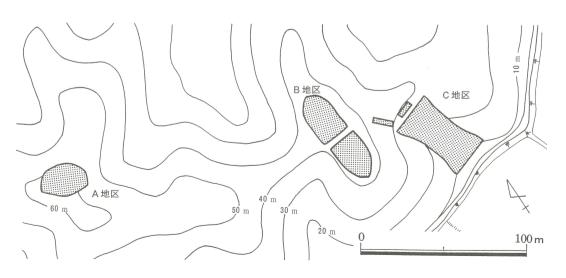
島田南遺跡の中で一番高所(標高60m)に位置する丘陵頂上部で、古墳状の高まりである。調査の結果、表土下約20~30cmで地山面に至ったが、遺構や遺物は認められなかった。

# B 地区

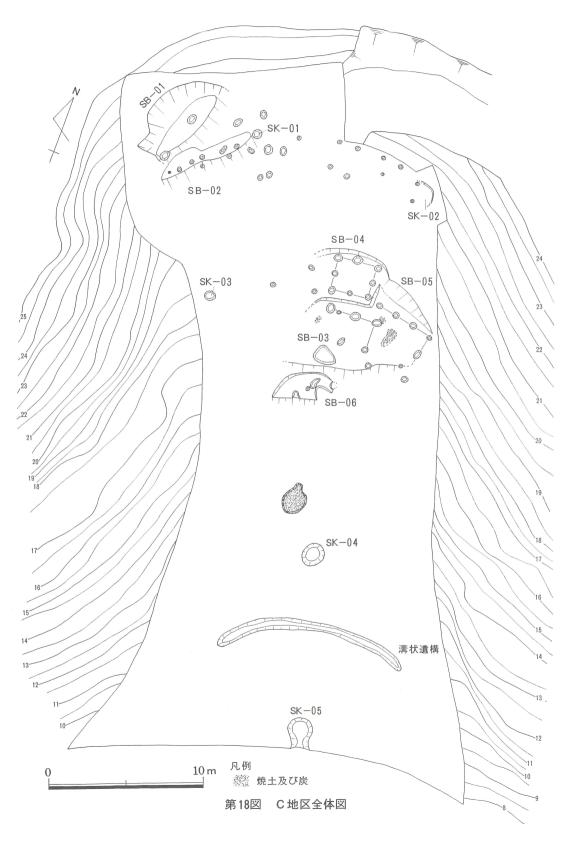
標高40mに位置する南北方向に長く延びる丘陵平坦面にグリッドを設定して、調査を行なった。後世梨畑として利用されていたため撹乱がひどく、遺構を検出することはできなかったものの、須恵器の甕片が10片程度出土した。

# C地区

B地区から南側へ緩やかに傾斜する谷間にグリッドを10箇所設定して調査を行なった。 B地区同様、後世梨畑として利用されていたため撹乱が多く、遺構は破壊されて検出不可能と思われたが、掘立柱建物跡 6 棟(SB-01~06)、焼土土壙 2 基、土壙 3 基、溝状遺構 1、その他ピット多数を検出した。



第17図 島田南遺跡調査区位置図



### SB - 01

調査区の北西側で検出したもので斜面を削って平坦面をつくり出していた。斜面奥側しか残存しておらず、床面には径約60cm、深さ約20~50cmの柱穴を2穴検出しただけである。柱間距離は3mを計るが平面形態は不明である。遺物は埋土中から須恵器と古式土師器の破片が少量出土しているが、実測可能であったのは古式土師器2点である。

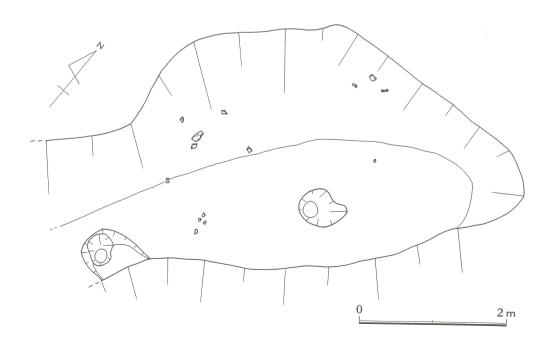
1は口径17.0 cmを計り、外面に13条の平行沈線を施している。内面頸部にヘラ磨き、外面頸部にハケ目、その他ヨコナデを施す。2は口径21.4 cmで口縁部のみ残存していた。内面はヨコナデを施しているが、外面は磨滅していてわかりにくいが、若干平行沈線が認められる。

### SB - 02

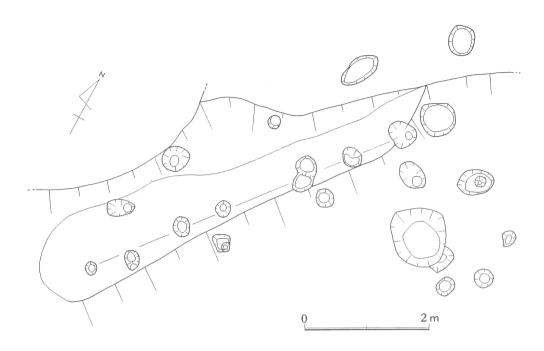
SB-01の西隣りに位置し、SB-01を削平してつくられていた。床面規模は南北  $1.0~m\sim0.5~m$ 、東西 6.5~mを計り、東側は削られていた。柱穴は東西方向に延びる一列 だけ検出したが、柱穴間の距離などが不規則であったため柵の可能性もある。

遺物は須恵器片と土師器片が少量出土したが、実測可能であったのは古式土師器 1 点である。

3は口径15.0cmを計るもので、外面ョコナデ、内面は磨滅していた。



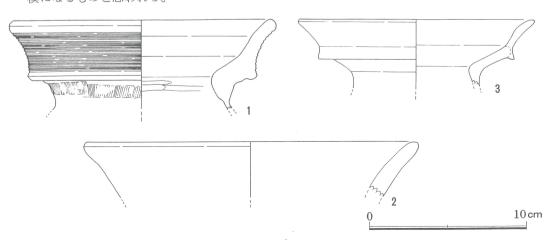
第19図 SB-01平面図



第20図 SB-02平面図

# SB - 03

谷間中央付近でSB-04、05を削平してつくられていた。柱穴は北壁側に3穴と床面南端に1穴検出した。径約 $50\sim60$ cm、深さ $35\sim50$ cm、柱穴間距離は1.6 mを計る。床面南端で東西70cm、南北60cm、深さ約50cmの不整形な土壙を検出したが、性格等は不明である。また、SB-03に伴う柱穴は、4穴しか検出していないため、2間×1間以上の規模になるものと思われる。

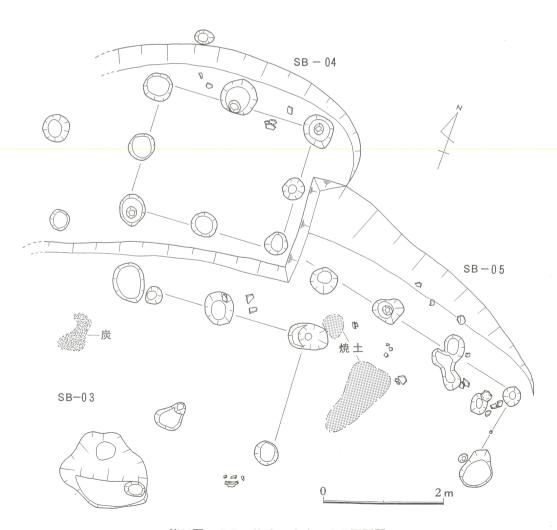


第21図 SB-01、02出土土器実測図

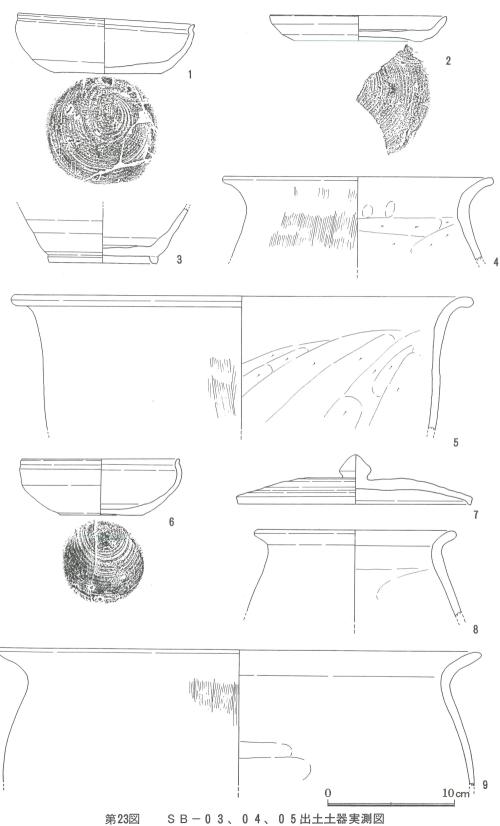
1 は須恵器の坏で口径 14.0 cm、器高4.9 cmを計る。口縁端部付近に若干凹面をつくり端部に至る。底部外面回転糸切り、その他回転ナデを施す。 2 は須恵器の皿で口径14.0 cm、器高2.0 cmを計る。口縁部は外傾してのび、底部は浅く広い。底部外面回転糸切り、内面静止ナデ、その他回転ナデを施す。 3 は須恵器の高台付坏で、口縁部を欠く。高台径は8.6 cmで、底部外面回転糸切り、その他回転ナデを施す。 4 は土師器の甕で口径21.4 cmを計る。口縁部は外反して端部に至る。内面はヘラ削り及び指頭圧痕、外面ハケ目、口縁部はヨコナデを施す。 5 は土師器の甑と思われ、口径36.6 cmを計る。口縁端部付近で横方向に屈曲する。内面へラ削り、外面ハケ目あり。

### SB - 04

SB-03の北上方で検出した2間×2間の小規模な建物跡であった。柱穴は径約45~



第22図 SB-03、04、05平面図



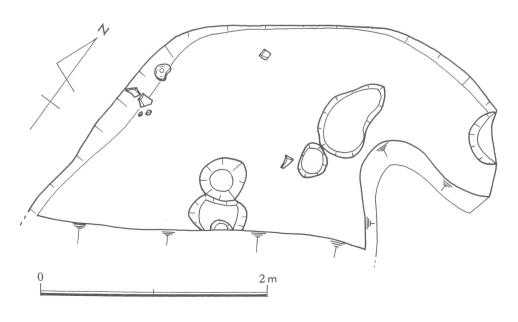
60cm、深さ $25\sim65cm$ を計り、柱痕跡の認められるものもあった。この柱痕跡から径約20cm程度の柱を使用していたことが判明した。柱穴間距離は約1.2mを計る。床面は南へ向かって傾斜していたが、貼り床などは確認できなかった。

6は須恵器の坏で口径12.5 cm、器高4.5 cmを計る。口縁端部付近に若干凹面をつくり端部に至る。底部外面静止糸切り、その他回転ナデを施す。7は須恵器の蓋で口径18.6 cm、器高3.9 cmを計る。天井部は低く宝珠状のつまみが付く。全面に回転ナデを施している。8は土師器の甕で口径16.0 cmを計る。口縁部付近で外反して端部に至る。磨滅がひどいが内面に若干へう削りが認められる。

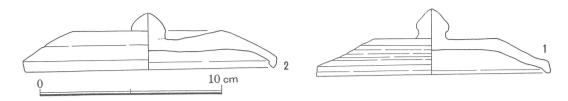
### SB - 05

SB-03、04によって西側を切られていた。北壁は約40~50cmの高さを計り、東へ向けて緩やかに下っていた。SB-05に伴う柱穴は5穴しか検出していないが、 $3間 \times 1$ 間以上の規模になるものと考えられ、SB-03、04より大きな建物であったと思われる。柱穴は径約50cm、深さ約30~70cm、柱穴間距離は1.2mを計る。床面中央付近に焼土を2ケ所検出した。

9は土師器の甕で、口径38.2cmを計る。口縁部は外傾してのびる。内面へラ削り、外面は部分的にハケ目が認められる。



第24図 SB-06平面図



第25図 SB-06出土土器実測図

# SB - 06

SB-03の南下方で検出したが、1/3しか残存していなかった。柱穴は3穴検出したが、平面形態は不明である。

1 と 2 は、須恵器の蓋である。口径  $12.8 \sim 14.0$  cm、器高  $3.1 \sim 3.6$  cmを計り、天井部に 宝珠状のつまみが付く。天井部は回転糸切りの後回転ナデ、その他は回転ナデを施している。

これらの建物跡以外からも多量の須恵器、土師器が出土しているが、須恵器の中には文字が刻まれたものもあった。また、土器の他に鉄滓や製鉄炉の壁の一部分と思われるものも出土した。

この他に、径約60~70cm、深さ40cmの焼土土壙、径約1.0~1.2 mの土壙、長さ約15 m の溝状遺構を検出したが、これらと建物跡との関係については今のところ不明である。

# 小 結

今回調査を行なった島田南遺跡では、C地区において掘立柱建物跡 6 棟、土壙 5 、溝状 遺構 1 を検出した。これらの遺構は遺物包含層に掘り込まれていたため、弥生時代終末期 から奈良、平安時代にかけての多量の土器が混在していた。本書に掲載した土器は主に住居跡床面出土のものであるが、SB-01、02 については床面出土のものがほとんど無 5 く、そのため埋土中の土器を使用している。

 $SB-03\sim06$ の時期について出土須恵器を検討してみると、高広遺跡の編年のIVA期  $\sim IVB$ 期にあたるものと思われ、8世紀中葉  $\sim 9$  世紀前半代頃に建てられたもののようである。また、 $SB-03\sim05$ については、切り合い関係が認められ、 $SB-05\rightarrow04\rightarrow03$ という順で建て替えられたことが伺えるが、詳細な時期差については今後検討したい。SB-01、02についても切り合い関係からSB-02の方が新しいことがわかるが、建造時期については把握できなかった。

掘立柱建物跡のうち、SB-05の床面から焼土が検出されており、他の建物跡とは様相が異なるようである。焼土は2箇所あるが、いずれも建物内に認められ、Cのことは床面全体あるいは一部分が土間であったことを伺わせる。CのようなC0 と他の建物跡との差異が時期的なものによるのか、特殊な建物であったためなのか判断できなかった。ただ、同じ安来市の高広遺跡においても、焼土を検出した掘立柱建物跡群があり、C1 に本遺跡より若干古い段階のものであることから、C1 の建てられた時期までは土間の掘立柱建物が造られていたのかも知れない。しかし、現段階では不明瞭な点も多く今後の課題としたい。

### <参考文献 >

『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1984 年

# V. 範囲確認調査の結果

今年度は、宮内遺跡・島田南遺跡の全面調査のほか、5遺跡の範囲確認調査を実施しま した。以下、その調査結果を記します。

# 臼コクリ遺跡

低丘陵尾根上や斜面にトレンチを47本設定して調査を行なった。遺構や遺物を検出した トレンチは6箇所であったが、多数のピットや土壙を検出した。

# 岩屋口遺跡

低丘陵尾根上や斜面、水田部分にトレンチを50本設定して調査を行なった。尾根上や斜面からは竪穴住居跡や土壙、横穴墓などを検出した。水田部分では耕作土下約1.5 mの地点で多量の流木とともに木製品や土器片が出土したが、遺構は確認できなかった。

# 越峠遺跡

丘陵上や谷間にトレンチを37本設定して調査を行なった。丘陵上では明瞭な遺構を確認できなかったが、多量の須恵器が出土している。谷間部分では弥生時代後期~古墳時代初頭頃の竪穴住居跡3棟を検出した。

# オノ神遺跡

丘陵上や谷間にトレンチを21本設定して調査を行なった。尾根上平坦面のトレンチから ピット1穴を検出しており、建物跡の一部と思われる。谷間のトレンチからは住居跡と思 われる落ち込みを検出し、その埋土中から須恵器が少量出土している。

# 谷遺跡

丘陵上や斜面、水田部分にトレンチを24本設定して調査を行なったが、流れ込みと思われる須恵器1片が出土したのみで、遺構などは検出できなかった。

以上、簡単に調査結果を記したが、全体的に梨畑による撹乱がおよんでおり、大部分の 遺構が削られていた。しかし、岩屋口遺跡や越峠遺跡では弥生時代後期から奈良時代にか けての大規模な集落跡が存在するものと考えられ、今後の調査で明らかにしていかなけれ ばならない。



宮内遺跡 I 区近景(西から)



宮内遺跡Ⅲ、Ⅳ区近景(南から)

# 図版2



I区遺構検出状況



I区SK-01土器検出状況



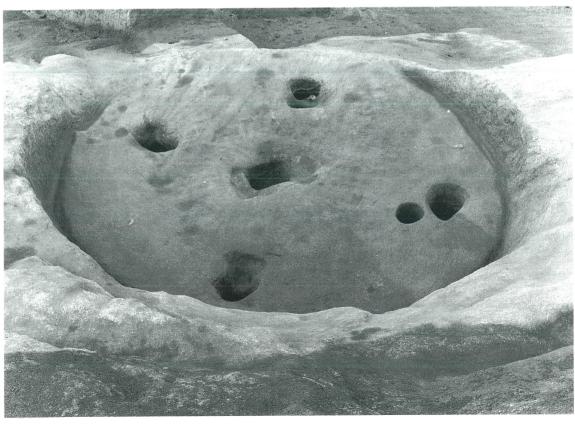
Ⅰ区SK-0 4 土器検出状況



 $\mathbb{N}\boxtimes\mathbb{S}\;\mathbb{I}\;-\;0\;1$ 



Ⅳ区SI-01土器検出状況

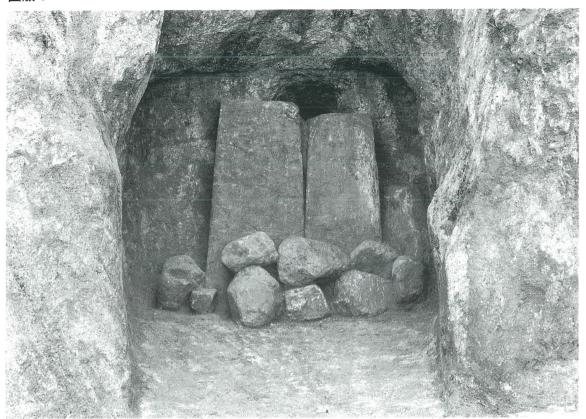


 $IV\boxtimes SI-02$ 

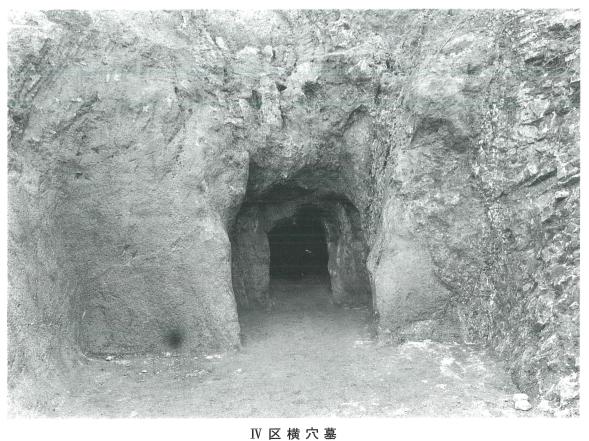


 $IV \boxtimes S I - 0 3$ 





IV区横穴墓閉塞状況







SB-01、02完掘状況



S B - 0 3 完掘状況



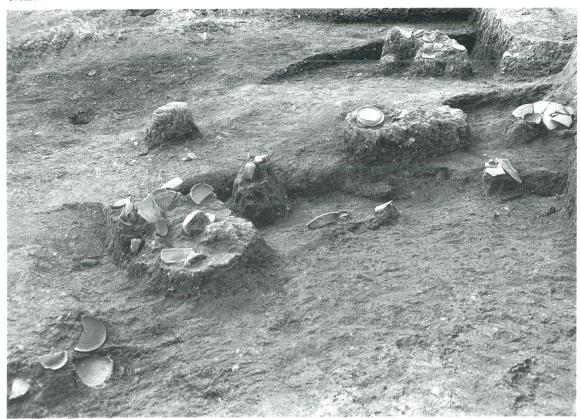
SB-04完掘状況



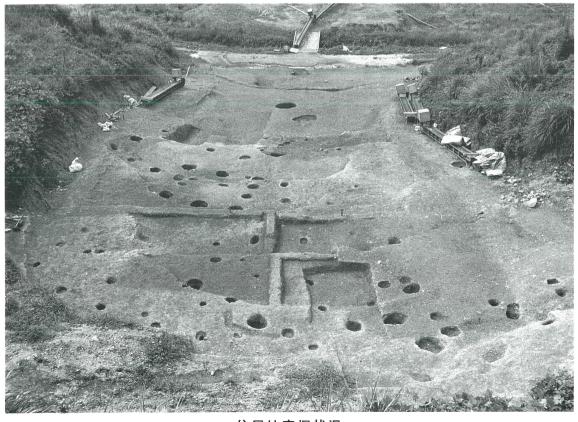
SB-05完掘状況



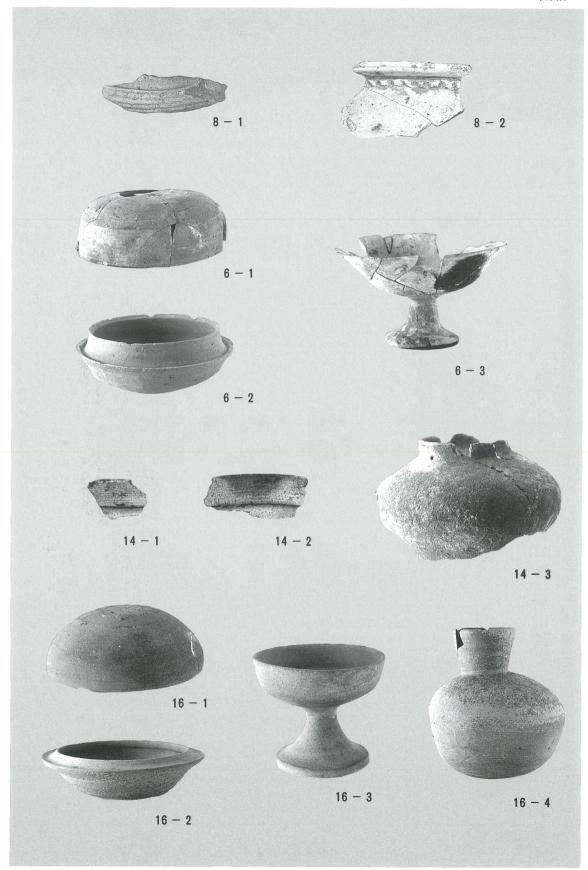
SB-06完掘状況



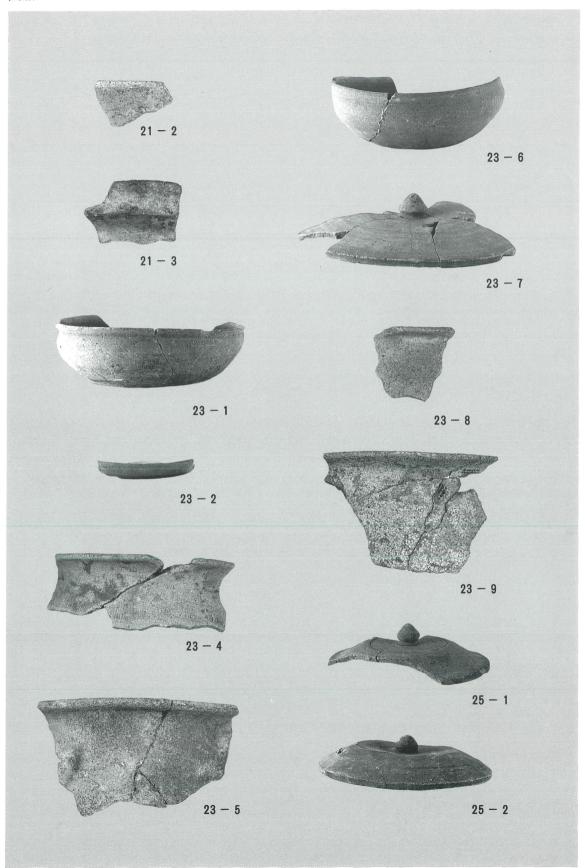
遺物出土状況



住居址完掘状況



宮内遺跡出土土器



島田南遺跡出土土器

平成3年3月 発行

一般国道9号安来道路建設予定地内

# 埋蔵文化財発掘調査報告書[[

編集·発行 島根県教育委員会 松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 谷口印刷

松江市母衣町89番地